

線形代数 (第18回)

18 1次独立・1次従属の判定と性質

ベクトル空間 V の要素 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ について

$$c_1 \mathbf{u}_1 + c_2 \mathbf{u}_2 + \dots + c_n \mathbf{u}_n = \mathbf{0}$$

を満たす実数 c_1, c_2, \dots, c_n が $c_1 = c_2 = \dots = c_n = 0$ のみであるとき, $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ は1次独立であると言い, そうでないとき, 1次従属であると言いました. 前回は, 数ベクトル空間や多項式ベクトル空間で, 1次独立・1次従属の判定をみました. 今回はまず, 一般的なベクトル空間で, 1次独立・1次従属の判定の仕方についてみます. 後半では, 1次独立・1次従属の基本的な性質について紹介します.

1次独立・1次従属の判定

ここでは, 例題を通して, 1次独立・1次従属の判定の仕方について学びます.

例題 18-1

ベクトル空間 V の要素 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2$ に対して

$$\mathbf{w}_1 = \mathbf{u}_1 + \mathbf{u}_2, \quad \mathbf{w}_2 = 2\mathbf{u}_1 - \mathbf{u}_2$$

と置く. $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2$ が1次独立であるとき, $\mathbf{w}_1, \mathbf{w}_2$ は1次独立か1次従属かを判定せよ.

[解答]

$$c_1 \mathbf{w}_1 + c_2 \mathbf{w}_2 = \mathbf{0} \quad (c_1, c_2 \in \mathbb{R})$$

とする. \mathbf{w}_1 と \mathbf{w}_2 の定義より

$$(\text{左辺}) = c_1(\mathbf{u}_1 + \mathbf{u}_2) + c_2(2\mathbf{u}_1 - \mathbf{u}_2) = (c_1 + 2c_2)\mathbf{u}_1 + (c_1 - c_2)\mathbf{u}_2$$

$\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2$ は1次独立なので

$$\begin{cases} c_1 + 2c_2 = 0 \\ c_1 - c_2 = 0 \end{cases} \quad \dots (*)$$

連立方程式 (*) の係数行列を基本変形すると

$$\begin{aligned} \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 1 & -1 \end{bmatrix} &\longrightarrow \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 0 & -3 \end{bmatrix} \\ &\longrightarrow \begin{bmatrix} 1 & 2 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \\ &\longrightarrow \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

従って, (*) の解は $c_1 = c_2 = 0$ のみ. よって, w_1, w_2 は 1 次独立である.

□

[復習] 定理 7-2 の主張を思い出しておきます. $m \times n$ 型行列 A に対して, n 変数 1 次連立方程式 $Ax = \mathbf{0}$ を考えるとき, 次が成り立ちました.

(1) $Ax = \mathbf{0}$ は自明な解のみ $\Leftrightarrow Ax = \mathbf{0}$ の解はただ一つ $\Leftrightarrow \text{rank}(A) = n$.

(2) $m < n$ ならば, $Ax = \mathbf{0}$ は自明でない解を持つ.

例題 18-1 では, 係数行列の階数 (=2) と変数の個数 (=2) が一致するので, (1) より (*) の解は自明なものしかありません.

例題 18-2

ベクトル空間 V の要素 u_1, u_2, u_3 に対して

$$w_1 = u_1 - u_2 + u_3, \quad w_2 = u_1 + 2u_2 + 4u_3, \quad w_3 = 2u_1 - u_2 + 3u_3$$

と置く. u_1, u_2, u_3 が 1 次独立のとき, w_1, w_2, w_3 は 1 次独立か 1 次従属かを判定せよ.

[解答]

$$c_1 w_1 + c_2 w_2 + c_3 w_3 = \mathbf{0} \quad (c_1, c_2, c_3 \in \mathbb{R})$$

とする. w_1, w_2, w_3 の定義より

$$c_1(u_1 - u_2 + u_3) + c_2(u_1 + 2u_2 + 4u_3) + c_3(2u_1 - u_2 + 3u_3) = \mathbf{0}$$

これを整理して

$$(c_1 + c_2 + 2c_3)u_1 + (-c_1 + 2c_2 - c_3)u_2 + (c_1 + 4c_2 + 3c_3)u_3 = \mathbf{0}$$

u_1, u_2, u_3 は 1 次独立なので,

$$\begin{cases} c_1 + c_2 + 2c_3 = 0 \\ -c_1 + 2c_2 - c_3 = 0 \\ c_1 + 4c_2 + 3c_3 = 0 \end{cases} \dots (*)$$

連立方程式 (*) の係数行列を基本変形すると

$$\begin{aligned} \begin{bmatrix} 1 & 1 & 2 \\ -1 & 2 & -1 \\ 1 & 4 & 3 \end{bmatrix} &\rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 0 & 3 & 1 \\ 0 & 3 & 1 \end{bmatrix} \\ &\rightarrow \begin{bmatrix} 1 & 1 & 2 \\ 0 & 3 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{bmatrix} \end{aligned}$$

行列の階数 (= 2) は変数の個数 (= 3) より小さいので, (*) の解は $c_1 = c_2 = c_3 = 0$ 以外にも存在する. よって, w_1, w_2, w_3 は 1 次従属である.

□

問題 18-1 ベクトル空間 V の要素 u_1, u_2, u_3 に対して

$$w_1 = u_1 + u_2 + u_3, \quad w_2 = u_1 - u_2 + u_3, \quad w_3 = u_1 + u_3$$

と置く. u_1, u_2, u_3 が 1 次独立のとき, w_1, w_2, w_3 は 1 次独立か 1 次従属かを判定せよ.

問題 18-2 ベクトル空間 V の要素 u_1, u_2, u_3, u_4 に対して

$$\begin{aligned} v_1 &= u_1 - u_2 + 4u_3 + u_4, & v_2 &= 2u_1 - u_2 + 8u_3 + 3u_4, \\ v_3 &= 2u_1 - 2u_2 + 3u_3 + u_4, & v_4 &= u_1 + 4u_4 \end{aligned}$$

と置く. u_1, u_2, u_3, u_4 が 1 次独立のとき, v_1, v_2, v_3, v_4 は 1 次独立か 1 次従属かを判定せよ.

1 次独立・1 次従属の性質

ここでは, 1 次独立・1 次従属の基本的な性質について確認します. 証明は煩雑になるのを避けるため, 限定した場合で与えています (アイデアは一般の場合も同様).

定理 18-1

ベクトル空間 V の要素 u_1, u_2, \dots, u_n について, 次の 2 つの命題は同値である.

$$u_1, u_2, \dots, u_n \text{ は 1 次従属である} \iff \begin{array}{l} u_1, u_2, \dots, u_n \text{ のうち少なくとも 1 つは} \\ \text{他の } n-1 \text{ 個のベクトルの 1 次結合で書ける} \end{array}$$

[証明]

$n = 3$ の場合を証明する.

⇒ の証明. $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ が 1 次従属ならば, 少なくとも 1 つは 0 でない実数 c_1, c_2, c_3 で

$$c_1\mathbf{u}_1 + c_2\mathbf{u}_2 + c_3\mathbf{u}_3 = \mathbf{0}$$

を満たすものが存在する. 例えば, $c_1 \neq 0$ とすると

$$\mathbf{u}_1 = -\frac{c_2}{c_1}\mathbf{u}_2 - \frac{c_3}{c_1}\mathbf{u}_3$$

となり, \mathbf{u}_1 は $\mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ の 1 次結合で書ける.

⇐ の証明. $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ について, 例えば

$$\mathbf{u}_1 = c_2\mathbf{u}_2 + c_3\mathbf{u}_3 \quad (c_2, c_3 \in \mathbb{R})$$

が成り立っているならば,

$$(-1) \cdot \mathbf{u}_1 + c_2\mathbf{u}_2 + c_3\mathbf{u}_3 = \mathbf{0}$$

は自明でない 1 次関係で, 従って $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ は 1 次従属である.

□

定理 18-2

ベクトル空間 V の要素 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ を考える. $m < n$ のとき,

$\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_m$ は 1 次従属である $\implies \mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ も 1 次従属である

[証明]

$m = 3, n = 4$ のときを証明をする. $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3$ が 1 次従属ならば, 少なくとも 1 つは 0 でない実数 c_1, c_2, c_3 で

$$c_1\mathbf{u}_1 + c_2\mathbf{u}_2 + c_3\mathbf{u}_3 = \mathbf{0}$$

を満たすものが存在する. このとき,

$$c_1\mathbf{u}_1 + c_2\mathbf{u}_2 + c_3\mathbf{u}_3 + 0 \cdot \mathbf{u}_4 = \mathbf{0}$$

は, $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3, \mathbf{u}_4$ の間の自明でない 1 次関係であるので, $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \mathbf{u}_3, \mathbf{u}_4$ は 1 次従属である.

□

定理 18-3

m, n は自然数で $m > n$ を満たすとする. ベクトル空間 V の要素 v_1, v_2, \dots, v_m と u_1, u_2, \dots, u_n に対して次が成り立つ.

$$\begin{array}{l} v_1, v_2, \dots, v_m \text{ はそれぞれ} \\ u_1, u_2, \dots, u_n \text{ の 1 次結合で書ける} \end{array} \implies v_1, v_2, \dots, v_m \text{ は 1 次従属である}$$

[証明] $m = 3, n = 2$ の場合を証明する. 条件より

$$v_1 = a_{11}u_1 + a_{21}u_2 \quad (a_{11}, a_{21} \in \mathbb{R})$$

$$v_2 = a_{12}u_1 + a_{22}u_2 \quad (a_{12}, a_{22} \in \mathbb{R})$$

$$v_3 = a_{13}u_1 + a_{23}u_2 \quad (a_{13}, a_{23} \in \mathbb{R})$$

と書けている. 定理 7-2 (2) により, 連立方程式

$$\begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \end{bmatrix}$$

は $(x, y, z) = (0, 0, 0)$ 以外の解を持つ. それを

$$\begin{bmatrix} x \\ y \\ z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_2 \\ c_3 \end{bmatrix}$$

とすると

$$\begin{aligned} c_1v_1 + c_2v_2 + c_3v_3 &= c_1(a_{11}u_1 + a_{21}u_2) + c_2(a_{12}u_1 + a_{22}u_2) + c_3(a_{13}u_1 + a_{23}u_2) \\ &= (c_1a_{11} + c_2a_{12} + c_3a_{13})u_1 + (c_1a_{21} + c_2a_{22} + c_3a_{23})u_2 \\ &= 0 \cdot u_1 + 0 \cdot u_2 \\ &= \mathbf{0} \end{aligned}$$

これは v_1, v_2, v_3 の間の自明でない 1 次関係なので, v_1, v_2, v_3 は 1 次従属である. □

問題 18-3 m, n は自然数で $m > n$ とする. このとき, u_1, u_2, \dots, u_m が 1 次独立ならば, u_1, u_2, \dots, u_n も 1 次独立であることを示せ.

問題 18-4 u_1, u_2, \dots, u_m が 1 次独立で, v が $v = c_1u_1 + c_2u_2 + \dots + c_mu_m$ と u_1, u_2, \dots, u_m の 1 次結合で表されるならば, c_1, c_2, \dots, c_m はただ 1 通りに決まることを示せ.